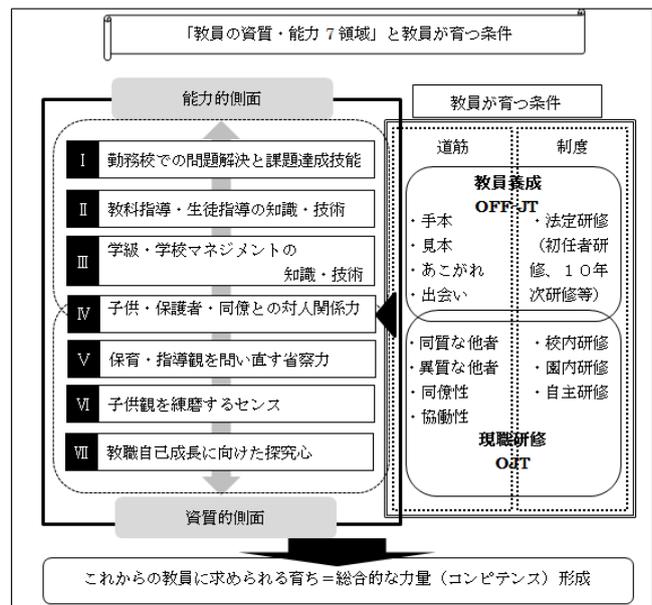


平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K11	氏名	石田 友貴
研究主題 —副主題—	「教師が育つ」連携の在り方について —保幼小連携校園における教員の子供観・指導観変容の分析を通して—		
所属校	品川区立第一日野小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>保幼小連携の重要性は以前から指摘されており、日本では幼児教育の位置付が変化してきた流れの中で、小1プロブレムの社会問題化が契機となり、連携の必要性が強く求められるようになった。(酒井、2010) 現在、保幼小連携はアーティキュレーションの問題として、子供の育ちを切り口に語られることが多く、教師を含めたコミュニティ全体での育ちの視点から実践的に検討された研究は少ない。</p> <p>そこで、保幼小連携が教員の資質・能力のどの部分に影響を及ぼしたのか質的に検討し、教員が育つ連携のあり方を明らかにする必要があると考え、本研究を行った。</p>
II 研究の方法	<p>【研究1】保幼小連携と教員の育ちに関する先行研究の整理および教員の力量カテゴリーの作成</p> <p>【研究2】保幼小教員のインタビュー質的検討 (保幼小教員7名対象)</p> <p>【研究3】保幼小教員の意識構造の整理及び比較検討</p> <p>【研究4】様々な異校種連携に関わる教員の意識変容の分析 (都内保幼小の教員97名対象)</p>
III 研究の結果	<p>【研究1】保幼小連携と教員の育ちに関する先行研究の整理 (下図参照)</p> <p>【研究2】保幼小教員のインタビューの質的検討</p> <p>インタビューの逐語記録を分析した結果、資質・能力カテゴリーのうち、【V保育・指導観を問い直す省察力】 【VI子供観を練磨するセンス】【VII教職自己成長に向けた探究心】については7名全員が言及していたことから、保幼小連携の取組は、教員にとって、その校種やキャリアにかかわらず、資質的側面への影響が見られることが示された。</p> <p>【研究3】保幼小教員の意識構造の整理および比較検討</p> <p>次に、逐語記録をキャリア別に整理し、サンプリング間の比較検討を試みた。</p>

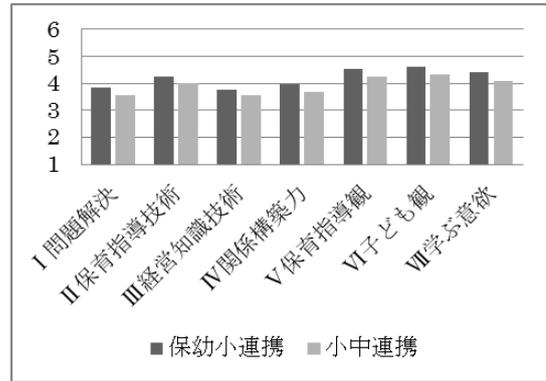


(図3)「教員の資質・能力7領域」と教員が育つ条件(今津、2012をもとに筆者作成)

その結果、保幼小連携が教員に与える影響やその意味付けには、教員のライフステージによる差異があることが示された。

【研究4】 様々な異校種連携に関わる教員の意識変容の分析

本研究に客観性を担保するため、都内で異校種連携を実施している保育園、幼稚園、小学校の教員 97 名についてアンケートを実施し、連携の取組と教員の資質・能力の変容の度合いの自己評価の相関関係や、連携のタイプによる差異の分析を行った。その結果、全7領域に



において有意差が見られ、小中連携に比べて保幼小連携に取り組む教員の方が、変容の自己評価の度合いが高いことが示された。また、いずれの連携タイプにおいても、**【V保育・指導観を問い直す省察力】****【VI子供観を練磨するセンス】****【VII教職自己成長に向けた探究心】**の得点が「まあまあ変化があった」の4.0点を超えている。この3領域は、**【研究1】「教員の資質・能力7領域」**のうち<資質的側面>と合致していた。このことから、異校種の連携は教員の資質・能力において、少なくとも<資質的側面>に与える影響が大きいこと、また、小中連携と比べて、保幼小連携では影響の度合いが強いことが明らかになった。

IV 考察

本研究では、教員にとって異校種連携の取組はどのように意味付けられ、影響を受けているのか実践者の声を聴きながら質的に検討してきた。**【研究2】**では、保幼小連携を通して1年生の子供にもここまで生きてきた歴史があり、培ってきた人間関係があるという事実を肯定的に捉え、自らの授業の在り方を問い直す作業を重ねる教員の姿が見られた。この教員は30年以上のベテラン層であるが、一般的に、教職10年目以降から教員としての職能が次第に低下するといわれる課題を見事に克服している。このように教員の<資質的側面>にプラスに働く効果は、既存の教員養成や研修では十分に得られなかったものであり、このことから異校種連携が教員の育ちに果たす役割は大きいと言えるだろう。

今後は、異校種連携の取組のどの部分が教員の育ちを促す要因になり得るのか、実証的な知見に基づいて明らかにするとともに、ライフステージや様々な校種タイプに応じた連携の在り方について検討することが課題である。